

# 零を継ぐもの2

邀撃

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

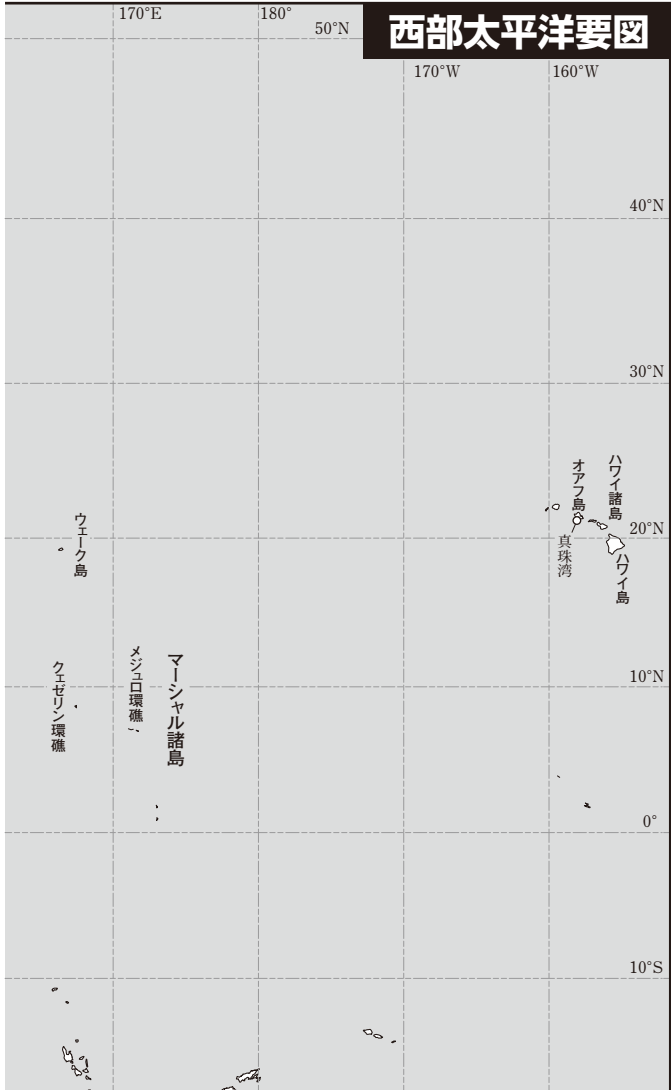
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

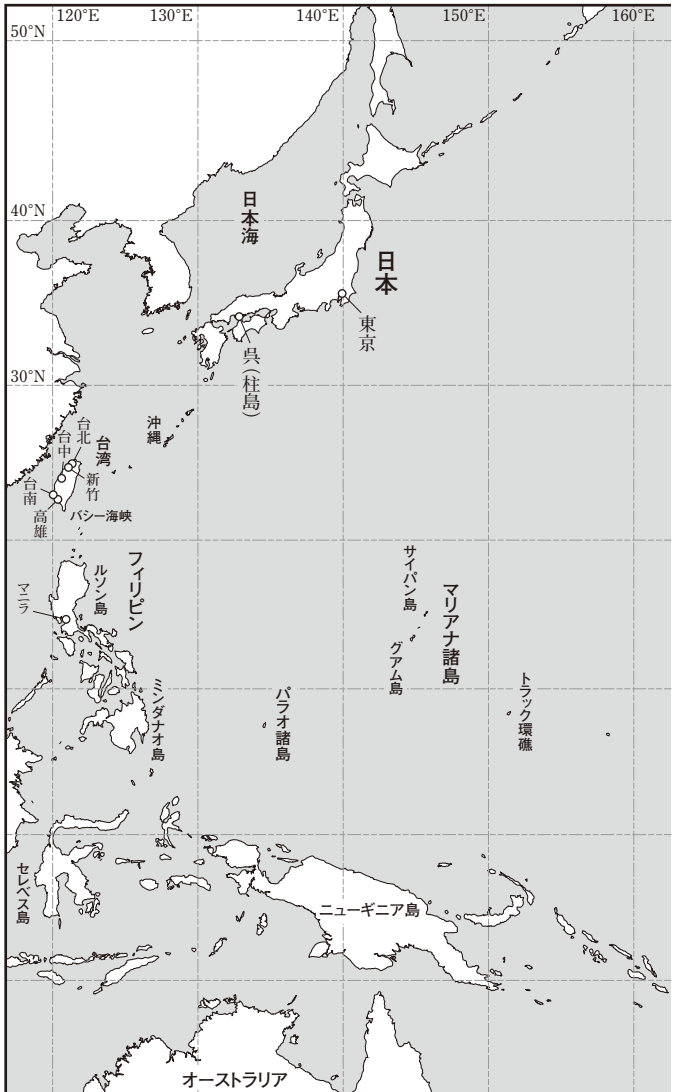
扉 画 佐藤道明  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたっふ

目次

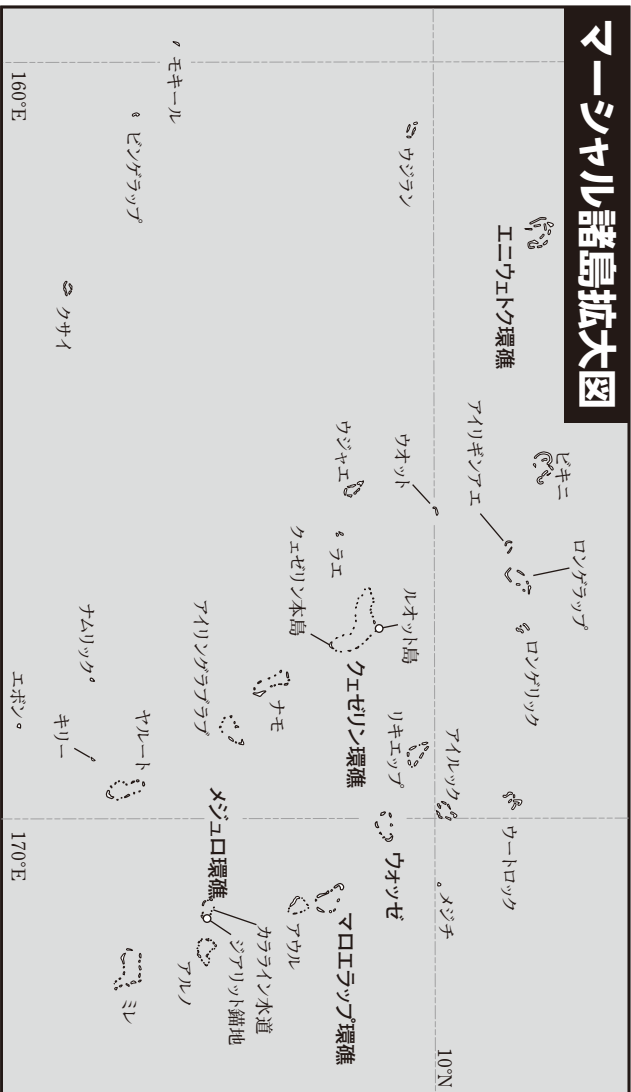
第一章	クエゼリン強襲	9
第二章	エジプトの「ダンケルク」	35
第三章	空母炎上	53
第四章	月下の前哨戦	113
第五章	決戦ウエーク沖	141
第六章	守られたもの	213

# 西部太平洋要図





# マーシャル諸島拡大図





## 零を継ぐもの2

---

邀撃



第一章  
クエゼリン強襲

## 1

クエゼリン本島の上空では、何十条もの飛行機雲が絡み合い、複雑な紋様を形作っていた。

その紋様を、かき乱し、切り刻むようにして、多数の機体が上下に、左右に飛び交っている。

クエゼリン本島の守りに就いている第一航空隊の零戦が、来襲した敵機を迎え撃っているのだ。

「ウエーク沖のお返しのもりか？」

千歳航空隊の溝畑徹中尉は、零戦を操りながら呟いた。

千歳空にとり、米軍機との対戦は二度目になる。

開戦初日のウエーク沖海戦では、同じ千歳空の一式陸上攻撃機と共に、クエゼリン環礁北端のルオット島から発進し、五四〇哩の遠距離を飛行して、敵機動部隊の上空に到達した。

そこでグラマンF4F「ワイルドキャット」と戦

った後、また五四〇哩を飛んで、ルオット島に帰還したのだ。

このときは三二機が出撃し、七機が未帰還となっている。

その日から一週間後の一〇月一〇日、敵機動部隊はマーシャル諸島を襲って来たのだ。

最初に攻撃を受けたのは、南東部のメジュロ環礁で、同地の守備隊は大打撃を受けている。

米軍は続けて、マーシャルの中心地であるクエゼリンに仕掛けて来た。

ルオットの千歳空にも迎撃が命じられ、エンジン不調のために出撃を見送られた機体を除いた二〇機が、クエゼリン本島に急行したのだ。

戦闘機隊長を務める飛驒昌之大尉の零戦が、大きくバンクした。

飛驒が直撃する第一中隊の零戦が真っ先に突撃を開始し、内田貞夫大尉が率いる第二中隊も続いた。

内田機と第一小隊の二、三番機は左に旋回する。

溝畑も、自身が率いる第二小隊の二機と共に、第一小隊に後続する。

二中隊の前方では、一群の機体が緊密な編隊形を組んでいる。

胴体の前半分が太く、後ろ半分が細い機体だ。風防は前後に長く、複座機であることをうかがわせる。ダグラス SBD、ドントレス。九九式艦上爆撃機のライバルとも呼ぶべき、米海軍の艦爆だ。

飛行場の滑走路か、付帯設備を狙っていることは間違いない。先頭の梯団は、今にも急降下に転じそうだ。

そのドントレス群を指して、第二中隊は真一文字に突進する。

右前方から、F4F四機が向かって来た。

第一小隊が右に旋回し、F4Fを迎え撃つ。

溝畑は二小隊を率い、ドントレス群に向かう。

ドントレスの一番機が機体を翻し、急降下に転じる。二、三、四番機がこれに続く。

五番機が機体を翻そうとしたとき、溝畑の照準器がこれを捉えた。

発射把柄を握るや、両翼に発射炎が閃き、真っ赤な太い火箭が噴き延びた。

火箭は心持ち下にカーブし、急降下に転じたばかりのドントレスに突き刺さった。

ドントレスの機首から黒い塵のようなのが飛び散り、炎と黒煙が噴出した。

溝畑に続いて、小隊三番機の岩田真治三等飛行兵曹が七番機を仕留める。

二番機の周防勲一等飛行兵曹は、一、三番機の後方で目を光らせている。

ドントレスの六、八番機が急降下に移ろうとするが、溝畑と岩田は逃がさない。

溝畑機の射弾は、横転したドントレスの風防に突き刺さる。

割れ砕けた風防ガラスの破片が飛び散り、コクピットが真っ赤に染まったように見えたが、機体はす

ぐに姿を消す。

岩田機の射弾は、敵八番機の左主翼を捉える。

閃光せんこうが走り、ドーントレスの左主翼は中央から分断される。

片方の揚力ようりょくを失ったドーントレスは、螺旋らせんを描くように回転しながら墜落する。

後方にいたドーントレス群のうち、四機が旋回し、第二小隊に機首を向けた。

一、二番機の機首に発射炎が閃き、四条の火箭が噴き延びた。

溝畑は、半ばなか反射的に操縦そうじゆうかん桿を倒し、左旋回をかける。周防機、岩田機は右だ。

傍はたからは、零戦三機がドーントレスに追い散らされたように見えたかもしれない。

左旋回をかけた溝畑機の横合いから、火箭が突き込まれる。

後席の偵察員が、旋回機銃を放ったのだ。

ドーントレスの後方に回り込む零戦を、七・七ミ

リ弾の細い火箭が追って来る。

溝畑は、右旋回に切り替える。

横転に近い角度まで倒れた零戦が、小さな半径を描いて、ドーントレス群の後ろ下方へと回り込む。

溝畑は操縦桿を手前に引き、エンジン・スロットルをフルに開いた。

ドーントレスとの距離が詰まり、照準器の白い環わが敵機の下腹しんぼらを捉える。

発射把柄しやへいを握るや、両翼から二〇ミリ弾の火箭がほとばしる。

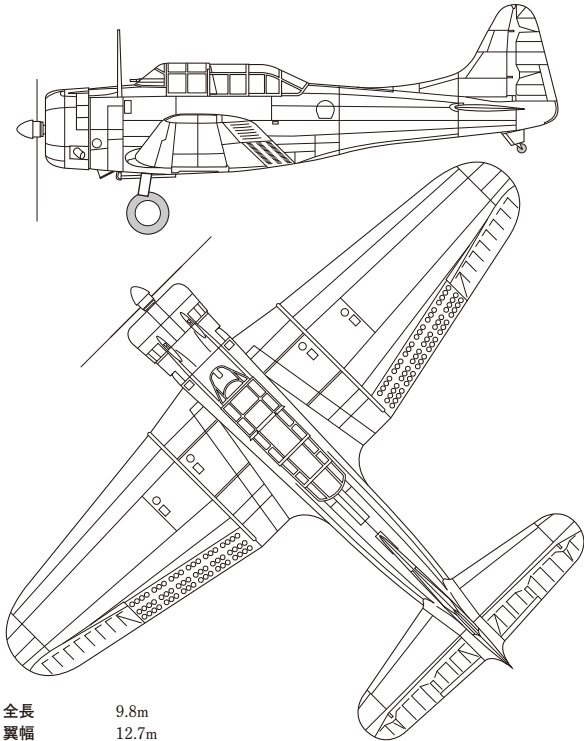
ドーントレスの下腹から、無数の破片が飛び散った。敵機は火を噴くことなく、大きく機首を下げ、真まつ逆さかさまに墜落し始めた。

周防機、岩田機も、一機ずつを仕留めている。

三機のドーントレスが炎と黒煙を引きずり、地上へと落下してゆく。

二小隊がドーントレス四機と戦っている間に、周囲からドーントレスの機影が消えている。

## アメリカ海軍 SBD 「ドントレス」



全長	9.8m
翼幅	12.7m
全備重量	4,719kg
発動機	ライト R-1820-52 1,000馬力
最大速度	402km/時
兵装	12.7mm機銃×2丁(機首固定) / 7.62mm機銃×2丁(後席旋回) 800kg爆弾×1(最大)
乗員数	2名

アメリカ海軍が運用する艦上爆撃機。陸軍、海兵隊でも使用されている。低翼配置の主翼、尾輪式とオーソドックスな機体構造に、引込脚やダイブブレーキを兼ねた穴あきフラップなど、さまざまな新機軸を採り入れた設計となっている。良好な運動性能に加え、機首に12.7ミリ機銃2丁を備え、しばしば戦闘機を相手に空戦を行っている。また、大きな航続力を生かして偵察機としても運用され、艦隊の目としても活躍している。

地上からは、何条もの黒煙が立ち上っている。

二小隊は合計七機のドーントレスを仕留めたが、爆撃の阻止はできなかつたのだ。

溝畑は残弾計を見た。

二〇ミリ弾は二〇発を残している。

あと一機、うまくすれば二機を墜とせる弾量だ。

溝畑は周防機、岩田機に合図を送り、引き上げつつある敵編隊に機首を向けた。

周防機、岩田機も、溝畑機に追隨する。

ドーントレス群の背後から、三機の零戦が距離を詰めてゆく。

敵の最後尾に位置していた機体が二機、反転した。

直掩のF4Fが追跡者の存在を知り、立ち向かつて来たのだ。

F4Fに特有の、太くて丸っこい機首が、みるみる拡大する。猪が、真正面から突っ込んで来るような凄みがある。

敵機の両翼に発射炎が閃く寸前、溝畑は操縦桿を

左に、次いで右にと倒した。

振り子のように振られる零戦の側方を、一二・七ミリ弾の青白い火箭が通過する。二、三発、胴体を擦つたらしく、打撃音が響く。

溝畑機と二機のF4Fが、互いに猛速ですれ違う。

溝畑は、後方を振り返らない。

両目は、前方のドーントレスのみを見つめている。

溝畑機の左に岩田機が、後方に周防機が、それぞれ占位している。

周防は個人の戦果よりも、僚機の援護を優先しているのだ。

(持つべきものは腕利きの部下だ)

腹の底で、溝畑は呟いた。

階級は、江田島出の士官である溝畑の方が上だが、戦闘機乗りとしての技量と経験は、周防が数段上をゆく。

溝畑が大分航空隊で戦闘機専修学生の訓練を受けているとき、周防は既に大陸の戦場で、一〇機以上

を墜としていたのだ。

にも関わらず、周防は溝畑を立て、よく補佐してくれる。

溝畑にとっては、勿体ないほどの部下だ。

ドーントレスとの距離が詰まる。

追跡して来る零戦に気づいたのだろう、ドーントレスが互いに距離を詰める。旋回機銃の弾幕射撃によって、零戦に対抗するつもりだ。

溝畑は左手で、ドーントレス群の下方を指した。

旋回機銃の死角になる、後ろ下方からの攻撃を示したのだ。

分かりました、と言いたげに、岩田が頷いた。

ドーントレス群が旋回機銃の発射炎を閃かせるよりも早く、溝畑は操縦桿を前に押し込んだ。

零戦が機首を下げ、緩降下に移った。

敵編隊の中央にいた一機が、機体を左に横転させた。垂直旋回をかけ、溝畑と岩田に機首を向けた。

(ドーントレスじゃない！)

溝畑は、敵機の正体に気づいた。

ドーントレス群の中央に、F4Fがいたのだ。

F4Fの両翼に、発射炎が閃いた。

青白い曳痕が、岩田機の機首から右主翼の付け根にかけて突き刺さった。

「岩田っ！」

溝畑が叫んだとき、岩田機の機首から炎が噴き出した。

機体を立て直そうとする動きも見せることなく、

黒煙を引きずりながら、海面へと墜ちてゆく。

「おのれ！」

溝畑の口から罵声が飛び出した。

岩田は、大器の片鱗を見せていた搭乗員だ。

初陣で零戦の性能限界とも言うべき一〇八〇哩の長距離飛行と空中戦をこなし、生還したのだ。

経験を積めば、周防にも劣らない凄腕の搭乗員になると期待を懸けていた。

その岩田が、成長する機会を得られぬまま、クェ

ゼリン沖の海面に消えていったのだ。

岩田機を墜としたF4Fは、機体を右に横転させ、垂直降下に移っている。

溝畑は躊躇うことなくF4Fを追う。

あのF4Fを、何としても墜とす。岩田の仇を討つ。

それ以外のことは考えられなかった。

一旦は、F4Fとの距離が縮まる。照準器の白い環が、F4Fの尾部を捉える。

発射把柄に力を込めようとしたとき、F4Fとの距離が開く。

溝畑はエンジン・スロットルを開くが、距離は縮まらない。F4Fの姿が、次第に小さくなって行く。

急降下性能では、F4Fの方が上だ。

「畜生！」

溝畑は、追跡を断念した。

歯噛みをしつつ、機首を引き起こしたとき、鋭い打撃音が響き、機体が僅かに震えた。

(しまった！)

溝畑は失敗を悟った。

F4Fだ。

先にすれ違った二機が反転し、溝畑機を追って来たに違いない。

溝畑は、左の水平旋回をかける。

あたかも行く手を塞ぐように、青白い火箭が前方をよぎる。

右旋回に切り替えれば、右前方に射弾が放たれる。左と右、どちらに旋回しても、F4Fの一二・七

ミリ弾が飛んで来る。

何発かが胴体を擦り、不気味な打撃音が響く。

右主翼に数発が命中し、補助翼がちぎれ飛ぶ。

被弾によって空気抵抗が増大したのか、零戦の速度が落ちる。

二機のF4Fは、溝畑の退路を塞ぎつつ、ぐいぐいと距離を詰めて来る。

(こんなところで……！)

溝畑は、唇を噛み締めた。

火を噴く機体や、自身の肉体が一二・七ミリ弾に貫かれる光景が、まぶたの裏に浮かんだ。

直後、左後方に火焰が躍った。

F4F一機が黒煙を噴き出し、急速に高度を下げてゆく。

残った一機は機体を横転させ、離脱にかかる。

たった今、F4F一機を墜とした周防機が、溝畑の右脇に並ぶ。

溝畑は、大きく息をついた。

地獄の門をくぐる寸前で、周防が現世に引き戻してくれたのだ。

周防が手信号を送っている。

後方——クエゼリン本島がある方向を指している。

基地に戻るよう、合図しているのだ。

溝畑は、正面上方を見た。

敵編隊は遠くなり、蒼空の中に消えかかっている。今からでは、追いつけない。

機体も被弾し、傷ついている。

追撃戦は、ここまでだ。

「済まぬ、岩田」

機体を反転させながら、溝畑は戦死した部下に詫びた。

深追いをしたばかりに、将来有望な若い搭乗員を死なせてしまった。

敵が引き上げにかかった時点で、帰還していれば、岩田を失わずに済んだはずだ。

悔やんでも悔やみきれない失態だった。

「まだ、終わったわけじゃない」

溝畑は、自身に言い聞かせた。

クエゼリン本島の飛行場は損害を受けたものの、なお健在だ。

ルオット島の飛行場は攻撃を受けていない。

敵がマーシャルの制空権奪取を狙っているなら、

第二次空襲が必ずある。

いや、司令部は敵機動部隊への反撃を考えている

のではないか。

いずれにせよ、岩田の仇を討つ機会はあるはずだ。

そう考えつつ、溝畑は傷ついた零戦を操った。

礁湖の向こうに見えていたルトット島が拡大し、

滑走路が視界に入り始めた。

## 2

攻撃隊は、ばらばらになつて帰還して来た。

多くは小隊単位、あるいは単機での帰還だ。

凱旋とは、到底言えない。銃を杖代わりによるめ

き歩く、敗残兵のような有様だ。

空母の飛行甲板上に滑り込んで来た帰還機を見る

と、一層その感を強くする。

胴体に大穴を穿たれたものの、主翼がささくれ立っ

ているもの、エンジン・カウリングに穿たれた破孔

からエンジン・オイルが漏れ出しているもの等、損

傷機がほとんどだ。

「負傷者あり。救護頼む」

と通信を送りながら、着艦して来る機体や、着艦

と同時に着陸脚が折れ、火花を散らしながら飛行甲

板上を滑る機体もある。

「ある程度の損害は覚悟していたが、ここまでやら

れるとはな」

アメリカ合衆国第一四任務部隊司令官オーブリ

ー・フィッチ少将は唸り声を発した。

旗艦「サラトガ」の通信室は、攻撃隊各機より発

せられた通信を傍受している。

「後ろに付かれた！ 振り切れない！」

「喰らった！ 火事だ！ 助けてくれ！」

「F4Fは何をやつてる！ 奴らを追っ払つてく

れ！」

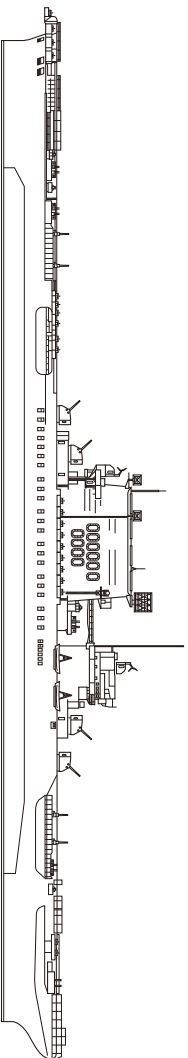
といった叫び声が、何度も受信されているのだ。

クエゼリン環礁は、マーシャルの中心となる存在

であるだけに、守りが非常に堅い。

受信された攻撃隊の通信や、帰還した各機の姿が、

# アメリカ海軍 レキシントン級航空母艦 「サラトガ」



全長	270.6m
最大幅	32.3m
基準排水量	36,000トン
主機出力	ターボ・エレクトリック 4基/4軸
出力	180,000馬力
速力	33.3ノット
兵装	12.7cm 38口径 連装砲用砲 4基 81門 12.7cm 38口径 単装砲用砲 121門 40mm4連装機銃 24基 20mm 単装機銃 24丁 70機～80機 レキシントン
航空兵装	
乗員数	2,791名
同型艦	レキシントン

アメリカ海軍が運用するレキシントン級空母の2番艦。もととはレキシントン級巡洋戦艦3番艦として起工されたが、ワシントン海軍軍縮条約による戦艦の保有制限を受け、空母に設計変更のうえ、1927年11月に就役した。全通式一段飛行甲板や右舷に島型艦橋を置いたレイアウト、凌波性を考慮した艦首など、非常に先見性のある設計と言われる。

一方で、竣工当時、艦橋の前後には20.3センチ連装砲が各2基ずつ配置されていたが、対空火力の増強を図るべく、12.7センチ連装砲用砲に換装されている。

搭載機数は70機から80機に達し、アメリカ海軍の空母のなかでは最多を誇る。開戦劈頭のウエーク沖海戦で僚艦「レキシントン」が被雷、修理工事を行っている現在、太平洋戦線では本艦が果たすべき役割は誠に大きいと言える。

その事実を物語っていた。

最後の一機が着艦してから数分後、航空参謀のシドニー・ブルームバーグ少佐が艦橋に上がって来た。「サラトガ」戦闘機隊の隊長テッド・クリンスマン少佐と急降下爆撃機隊の隊長ヴィクター・チップス中佐を従えている。

クリンスマンは血が滲んだ包帯を頭に巻いており、チップスは左腕を三角巾で首から吊っていた。

「第一次攻撃隊の出撃機数、F4F二八機、ドーントレス四四機、計七二機です。帰還機数はF4F一七機、ドーントレス二九機、計四六機です。第二次攻撃隊は、F4F二四機、ドーントレス四〇機、計六四機です。帰還機は、F4F一六機、ドーントレス二五機、計四一機です。第一次、第二次とも、帰還機には被弾・損傷している機体が多く、直ちに再出撃の可能な機数は、二艦合計で六〇機を割り込むと見積もられます」

沈んだ声で、ブルームバーグは報告した。

「損耗率は三六パーセントか」

呻き声を上げた参謀長ジエームズ・ホイットニー大佐に、ブルームバーグは言った。

「クルーについては、損耗率は更に高くなります。機上戦死したドーントレスの偵察員や、重傷を負い、復帰は不可能と思われるF4Fのクルーがおりますから」

「クエゼリンにおける日本軍の防空態勢は、そこまで強力ということか？」

フィッチの言葉に、クリンスマンが無念そうに答えた。

「敵戦闘機に手こずりました。ジークのコード名で呼ばれる機体です」

ジークは、速力、上昇性能、運動性能の三つでF4Fを上回っており、VF3も、「ホーネット」戦闘機隊も苦戦を強いられた。

特に旋回性能が高く、F4Fが有利なポジションを取っても、すぐ後方に回り込まれてしまう。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。